新・下野市風土記　憶良の悩み

下野市教育委員会　文化財課

新元号「令和」の出典である『万葉集』巻五、梅花の歌三十二首の序文の作者については諸説ありますが、一説には万葉歌人の大伴旅人ではないかと推測されています。
今回は、この大伴旅人と大宰府で交流を深めた万葉歌人、山上憶良のお話しです。

憶良の歌のテーマは

山上憶良は、生まれた年も不明な、謎多き人物です。山上の名称は大和国添上郡山辺郷に由来するという説がありますが、詳細はわかっていません。

大宝元(701)年に第七次遣唐使の小録(記録や文書作成を担当する録事を補佐する役人)に任じられたことが『続日本紀』に記されています。一説では、このとき42歳だったようですが、それまでの足取りは定かではありません。

このときは、船が五島列島付近で嵐に遭遇して引き返しましたが、翌年は渡航に成功します。2年ほど唐に滞在して儒教や仏教などを学び、慶雲元(704)年7月に帰国しました。

この前後、憶良は、下毛野古麻呂と藤原宮で行き会っていたかもしれません。憶良を遣唐使に推挙したといわれている第七次遣唐使の執節使(大使よりも上位の使節)の粟田真人は、憶良の縁者で、古麻呂とともに大宝律令の制定に関わった人物です。まして古麻呂はこの頃、藤原不比等の右腕として宮中で重要な役割を担っていました。役人で、古麻呂の名を知らない者はいなかったはずです。

憶良は、霊亀二(716)年には伯耆守に任じられ、5年後、任を終えて都に戻った養老五(721)年には、佐為王や紀男人らとともに東宮(首皇子のちの聖武天皇)の侍講(君主に仕え、学問を講義する役人)に任じられました。

その後、神亀三(726)年ごろ筑前守に任じられます。ここで憶良は、後から大宰帥(長官)として着任してきた大伴旅人と出会い、親交を深めました。そして、天平二(730)年、旅人が催した宴で、ともに梅花の歌を詠むことになるのです。

この年の12月、旅人は大納言となって都に戻りました。2年後、憶良が任期を終えて都に戻ったときには、旅人はすでに亡くなっていました。

憶良は、「貧窮問答歌」をはじめとする社会にまつわる歌や、貧困・老・病・死をテーマにした約80首の歌を万葉集に残しています。老いや病などを題材にした歌が多いのは、この頃すでに高齢で、憶良本人が病に苦しんでいたからなのかもしれません。

憶良の晩年

天平五(733)年3月1日、遣唐大使に任命された多治比広成が、遣唐使として派遣されたときの話を聞くために憶良の住まいを訪ねました。このとき、憶良が詠んだ歌が「好去好来の歌」として有名です。自分がかつて唐に渡ったときの誇りと使命感に満ち溢れた歌です。

この多治比広成も、下毛野古麻呂や下野国と深いつながりのある人です。和銅元(708)年に従四位下の古麻呂が式部卿に任じられたとき、従五位下の広成は下野守に任じられています。また、従四位下の位をもっていた兄の池守も同じ日に民部卿に任じられています。

多治比広成の訪問の3か月後、憶良は、これも有名な「沈痾自哀文」のなかで、74歳にして10余年にわたり病に苦しんでいると書き残しています。同じころ、「老身、重病、年を経て辛苦す、及び児等を思う歌」も詠んでいます。また、藤原朝臣八束が河辺朝臣東人を憶良の見舞いに行かせると、涙を流しながら「士やも空しかるべき萬代に語り継ぐべき名は立てずして」(男子たるもの後世に語り伝えられるべき名声も立てずに、このまま朽ち果ててしまっていいものだろうか)という歌を詠んだといいます。

憶良の、生と名声への強い思いが垣間見えるエピソードです。